



桜美林エコレジのレジ袋削減キャンペーン

第2弾の今回も大学生協と協働してさまざまな新機軸

桜美林大学の環境サークルであるエコレジが昨年末にひきつづき、不要なレジ袋削減キャンペーンを桜美林生協と協働しておこないました。削減キャンペーン第2弾となる今回は、5月11日から29日まで実施。キャンペーン期間の昼休みにはエコレジのメンバーが生協入り口にたち、お弁当やお菓子などを買いにきた学生たちにレジ袋の辞退を呼びかけました。

多数の新入生が入ってパワーアップしたエコレジ

今回の第2弾キャンペーンでは、昨年の反省を活かした取り組みの工夫がいくつもみられました。生協店内に設置された特設コーナーでは、前回のキャンペーンでの削減率をボードで展示するだけでなく、独自に編集した動画をDVDレコーダーで繰り返し流して来店者の注意を引いていました。動画編集はその分野に長けた新入生の手によるものとのこと。それ以外にも、エコレジのオリジナル店内放送をテープに吹き込んで昼休みの時間に流したり、店頭で積極的に声かけをおこなったり、とても元気にぎやかなキャンペーンでした。生協職員の方々も全面的に協力。今回のキャンペーンでは目標削減率の70%(前回は期間中61.6%を達成)を超えたあかつきには店長さんのご厚意により、一部商品を対象とした特別セールを実施するそうです。



楽しく飾りつけのされた生協店内特設コーナー



お昼休みに生協で声かけをするエコレジのメンバー

初夏にかけてはオリジナルエコバッグ企画を展開

エコレジでは、キャンペーンと同時並行で、桜美林学生によるオリジナルエコバックの制作を企画。5月18日～6月19日の期間で「学生が持ちたくなるデザイン」をテーマにした、エコバックのデザインイラストを学内でひろく募集しました。引き続き6月22日からは桜美林生協横の特設テントで、集まったデザインを展示して学生による投票を実施(投票期間は6月22日～7月3日)。その投票をもとに応募されたイラストからふたつを選出し、その選ばれたデザインを、エコバックに印刷して販売することです(販売期間は7月21日からを予定とのこと)。

昨年、3年生(現4年生)を中心に結成されたエコレジですが、今年は多数の新入生が入部し、ますます活動の幅を広げているようです。リニューアルしたエコレジのホームページでも、今回のキャンペーンの様子を知ることができます。メンバーが持ち回りで日々の活動を書き込むブログもぜひご覧下さい。

桜美林大学環境サークル「エコレジ」ホームページ http://www.geocities.jp/eco_reji/

第71号目次

桜美林エコレジのレジ袋削減キャンペーン	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(六)	渋谷 謙三 2
町田に新しいプラネタリウムを！——町田にプラネタリウムを作る会に聞く	5
「まち歩き:鶴岡・酒田編」	大橋 成夫 6
事務局だより・編集後記	8

■新庁舎建設への準備(2) — 三鷹市に学ぶ

前号では、1967年(昭和42年)に町田市に企画部企画課が新設され、初めて集合住宅計画に対する組織的な対応が始まったこと、また、町田市政の新しい核としての市庁舎建設事業と、併せて行政事務近代化へ向かって動き出した青山市政の模様をお伝えした。

都市型の行政事務への移行とも言える一連の作業の中で、たまたま三鷹市の鈴木平三郎市長から学んだ「高環境＝高福祉」なる行政哲学は、未だ30歳代前半の職員だった私の忘れ難い貴重な体験として今なお記憶に新しい。今回も引き続き三鷹市に学んだことから筆を起したい。

鈴木市長が、ご自身の哲学を具現化する「日本初の都市下水道100%整備」という政策を掲げ、腹心の安田養次郎氏と共に財源を生み出すための市政効率化と少数精鋭化に心血を注ぎ、実現に漕ぎ着けた話は余りにも有名だが、私は幸運にもこの事業完遂の道半ばに、市長の熱い胸の内を直接伺う機会を得たわけで、前号でもご紹介したように、当時のお役人の仕事振りを評した歯に衣を着せぬ痛烈な言葉の節々に、並々ならぬ鈴木市長の情熱が溢れ出ていることと、その根底にはただ単に行政効果を挙げることを目的とせず、自己の信念を貫徹する政策を掲げ、その実現のための鈴木流の構造改革と財源の捻出を最優先する政治姿勢に、痛く感動し心を揺さぶられたことを覚えている。

それから実に32年経ち、三鷹市政は既に後継者の安田氏が受け継いでいた1998年(平成10年)9月、日本経済新聞が「業務効率化や透明性など約50項目」の取り組み状況を総合得点化した偏差値の評価点で、三鷹市が「全国第1位」を獲得したと報じた。(右欄記事参照)

これは、鈴木、安田両市長の二代に亘る市政の永年の効率化、少数精鋭化の地道な努力が、幾重にも積み重ねられた素晴らしい成果であることは言うまでもないが、この機会に、そのお

民間委託や企業会計方式の導入などにより「非効率で閉鎖的」といわれる役所仕事の改善に取り組む自治体が増え

東京・三鷹市が1位

効率的で開かれた自治体

によると、改善度トップは東京都三鷹市だった。(詳細を7日発行の「日経地域情報」に)

ている。日本経済新聞社と日経産業消費研究所が全国六百七十市を対象に実施した調査

調査は七月上旬―八月中旬に実施し六百十八市が回答。業務効率化や透明性などにか

670市、本社調査 情報公開を率先

行政事務の改善度	自治体名	偏差値
10	三鷹(東京)	82.7
9	松本(長野)	81.5
8	川崎(神奈川)	80.0
7	尼崎(兵庫)	76.2
6	藤沢(神奈川)	74.8
5	新潟(新潟)	74.8
4	横須賀(神奈川)	74.2
3	相模原(神奈川)	74.2
2	調布(東京)	72.9
1	宗像(福岡)	72.9

かわる約五十項目の取り組み状況を得点化し総合得点から偏差値を出した。三鷹、川崎市は審議会や委員会の公開にいち早く踏み切った。三鷹は公共施設の運営を住民に委託し、川崎は無駄を洗い直す事務事業評価制の導入でも先行。松本市は土曜の窓口サービスを充実しており、尼崎市は資産や負債管理のため企業会計方式を準備中だ。

1998年9月6日付の日本経済新聞

二人にまつわるとても興味深い裏話をご披露したい。後年、安田市長から直接聞いた話である。

三鷹市の鈴木平三郎市長は、1955年(昭和30年)4月に社会党公認候補として初当選した。選挙の公約は言うまでも無く「日本初の都市下水道100%整備」とその達成手段としての「非効率行政の打破」だった。まだ若手の職員だった安田さんは何故か目をかけられ、新市長の家で1ヶ月間近く寝食を共にして、鈴木平三郎のすべてを身体で嗅ぎ取り、彼がどんな性格で何を考え、何を望んでいるのか。つまり鈴木平三郎の長所も欠点も全て知り尽くせという厳しい試練を課せられ、彼は必死で耐え抜いた。恐らく、鈴木氏の人柄と三鷹市に賭けるロマンと情熱が飛び切り上等だったのだろう。お蔭で自分の血液まで入れ替えられた分身のような気分になり、市長が今、何を考えているか判るようになった、と笑いながらつぶやいたのが印象的だった。以後20年の間、三鷹市の日本初都市下水道100%敷設整備の偉業と、それを支えた効率的行政の完遂はこの二人の主従コンビで成し遂げられた。(これは世界でも6番目に達成された偉業である)

私は、この裏話と同時に、鈴木市長が計画した下水道の受益者負担制度に反対した与党の社会党を、自ら離脱して2回目の当選を果たしたことも知り、「仕事に命を賭ける」男たちの気概と腰の据わった姿を初めて見た思いがした。人間は誰も独りで社会的な仕事はできないこと、心底信じあった相棒がいて「初めて事は成る」ことを教わった。

今、三鷹市は清原慶子市長が継いでいる。この人も安田市政の後世に残る業績ともいえるべき「みたか市民プラン21、パートナーシップ協定」を結んだ時の市民代表で200人近い三鷹市民を取りまとめた女性であり、まさに鈴木、安田を継いで効率的、少数精鋭の市政の後継者としてふさわしいと市民が判断し当選させた市長と言ってよい。

■新庁舎建設への準備(3) — 都市型行政への体制づくり

さて、話を再び1967年(昭和42年)の頃の町田市に戻そう。合併で誕生した9年前の6万人強だった人口は、この年の4月には2倍の12万人を越えた。それまで、事あるごとに顔を出した旧4ヶ町村の目に見えない人と物のさまざまな壁は、この頃からようやく少しずつ氷解しながら、次第に市全域に一体化の兆しを見せ始めていた。

しかしその一方で、市政を執行する市役所本庁舎は、年間1万近く増加する人口と比例して増える職員数にもかかわらず、依然、合併当時の町役場のままの古ぼけた2階建ての小さな木造庁舎とそれを取り巻く木造平屋の3棟の粗末な建物に分散しながら執務を取り続けていた。しかも、この間を唯ひたすら新しい都市・町田づくりのさまざまな種を撒き育ててきた初代の青山藤吉郎市長の3期目の任期は、余すところ3年余りとなっていた。こうした中で、役所に出入りする関係者や市民たちの間で、誰言うとなく、青山市長の最後の仕事として新しい庁舎建設が行なわれるだろうという声が囁かれるようになっていた。しかし青山市長がいくらそう望んだところで、余すところ3年余りで、果たして時間的に間に合うものなのか、担当するはずの企画課の職員たちの心中は、私を含め正直穏やかではなかった。

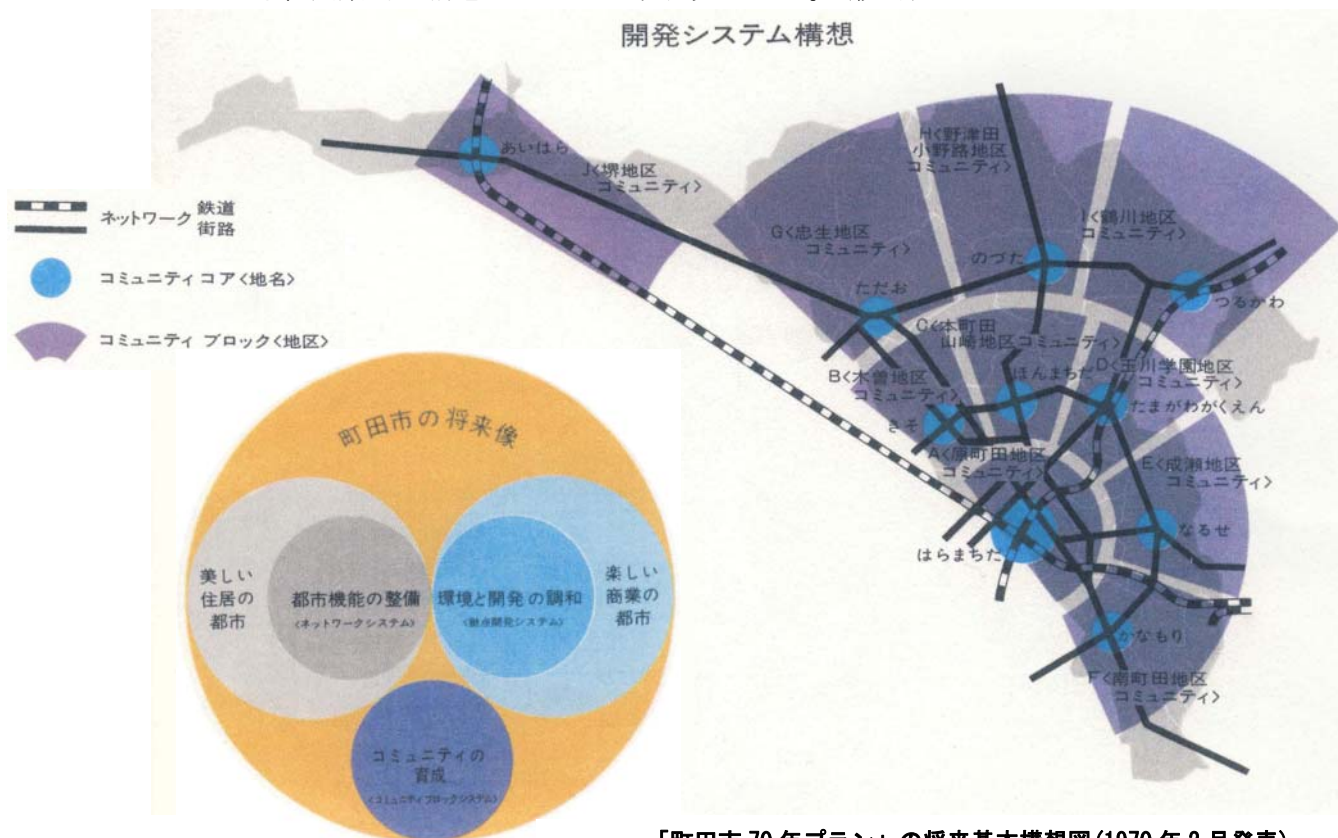
「渋谷君、一気呵成にやろう。将来をにらんだ組織機構を整え、長期の総合計画をつくり、新しい都市行政にふさわしい器としての新庁舎建設に向かえば、それが多くの市

民の新しい求心力になる」、坂本企画課長の力強い命令が下った。

まずは、町田市の新しい住宅・商業都市の基本構想づくり、次に新庁舎を十分に活かす機能を持つ組織・機構改革と諸規則整備や文書管理システムの改善、そして青山市政の仕上げの仕事とも言うべき市庁舎建設事業などについて順次お伝えしよう。

●町田市が打ち出した初めての「住宅商業都市・町田」の基本構想

都市としての長期総合計画をつくることは、合併誕生以前から町田新市政の重要な課題とされてきた。だから企画課が生まれた時から東京都から小室氏という都市計画家を招いて町田市の本格的な骨格づくりなどについて指導を受け、基本構想の検討を開始していた。その構想の概要は、『町田市は首都圏近郊の美しい住宅都市・楽しい商業都市をめざし、各地域のコミュニティを育てる文化の街にする』というもので、その骨組みづくりとして、旧4ヶ町村を一体化するための都市計画を導入し、地域を用途区分化し、幹線道路網を整備して全市域を結びつけ、同時に各地域の中心拠点を整え、バランスよい住宅と商業の機能を整え各地のコミュニティの育成を図るといったものだった。これは「町田市70年プラン」と呼ばれ、基本構想部分のみが印刷されて1970年2月、新庁舎建設の落成式典で初めて公表され、市民に配布された。しかし、青山市長らしい気遣いから、あくまでも町田市政の参考資料という位置づけが災いし、次期大下市長からは一瞥もされぬまま葬り去られる運命となった。いま思い返すと、市内の優先整備すべき幹線道路網を強調し、各地域の開発拠点及び育成するコミュニティの性格付けがなされた点だけでも、画期的な構想だったという自負がある。(続く)



「町田市70年プラン」の将来基本構想図(1970年2月発表)

町田に新しいプラネタリウムを！

——町田にプラネタリウムを作る会に聞く

昨年(2008年)の3月31日、東急百貨店屋上のプラネタリウム「東急まちだスターホール」がその28年の歴史に幕を下ろしたことは記憶に新しい。町田で生まれ育った団塊ジュニア世代ならば子どもの時に学校の行事などで一度は行ったことがあるだろう。年間4万人が来場し、それ以外の世代に幅広く親しまれたスターホール。閉館を残念がる人は多かった。スターホールを愛する有志は「町田にプラネタリウムを作る会」を発足させ、2007年の夏から署名活動をおこなった。署名はその年の暮れまでに7190筆に達し、要望書とともに市に提出された。スターホールが閉館をした後も、町田にプラネタリウムを作る会は地道な活動を続け、昨年秋には、「玉のよこやまアート&ウォーク」にて五藤光学研究所とともにプラネタリウムの実演をおこない、3日間で3千人近い来場者を集めた。今回、町田にプラネタリウムを作る会の代表、石坂貴之さんにこれまでの会の活動とこれからの展望についてお話をお伺いすることができた。

星好きになるきっかけだったスターホール

有志の会を立ち上げてまで存続を訴えたその思いはどこから来たのか。石坂さんは星を好きにするきっかけがスターホールだったと語る。星の世界への入り口を作ってくれるプラネタリウムが町田からなくなってしまったら、町田の子どもたちはひとつの可能性を選ぶことができなくなってしまふ。実際に、人口40万人を超える自治体で科学館をふくめプラネタリウムを市域にもたない自治体はむしろ少数であることを、表を示して説明いただいた(たとえば相模原市立博物館にもプラネタリウムは併設されている)。こうした切実な思いからスターホール内や中心市街地で署名活動をおこなった町田にプラネタリウムを作る会。路上での署名活動では、道路使用許可書を申請するなど多くの市民に理解を求めるための努力を惜しまなかった。そうした謙虚な取り組みの姿勢が、多くの署名——現在は1万筆に届くところまできている——につながったのではないだろうか。

スターホールの復活ではなく、新しいプラネタリウムとして

現在、町田にプラネタリウムを作る会は、プラネタリウムをあくまでもメインとしつつ、科学館という幅の広い構想を練り上げて活動を続けている。昨年末に市に提出された要望書のなかにも、サイエンスカフェや「星のソムリエ(星空案内人)」というかたちでの市民ボランティアの構想が描かれている。石坂さんはスターホールへの追想を胸に秘めつつ、新しいプラネタリウム施設のあり方とそのもとでのプログラムを語った。構想のこうした深まりが、昨年の玉のよこやままでの「子ども博物館」という人気イベントにつながったと言えるかもしれない。町田市における各文化施設の位置づけ、博物館のあり方があらためて問われているなか、町田にプラネタリウムを作る会の活動実績とその提言は、今後ますます価値あるものになるのではないだろうか。

町田にプラネタリウムを作る会のホームページをぜひご覧ください。なお、ネット上でも署名をすることができます(文責：編集部)。

町田にプラネタリウムを作る会ホームページ <http://machida-planetaria.fixa.jp/>



路上で署名活動をおこなうメンバーたち

「まち歩き:鶴岡・酒田編」

会員 大橋成夫

東北荘内の「公益」の人たち

鶴岡に4月24日、定刻の12時47分に着き、駅を出たら雨空でいまにも降りそうな雲行きだ。人の姿はちらほら見受けるだけで、正面の大通りは車とバスが行き交うのみ。左手の5階建てショッピングモールには灯もなく、ひっそりと閉店の挨拶状が玄間シャッターに張り出されていた。残念乍ら、最近地方のJR駅前によく見る風景だ。

まずはまち歩きと、地図を片手に中心街へと歩き出した。大通りを一本はずれ平行している通りに行く。大通りより鶴岡らしい風景に出くわすだろうと考えた。

鶴岡は、中世、武藤氏が築いた城下町。戦国時代現在の鶴岡市を含む飽海郡一帯を支配するが、家臣達の離合集散が繰り返されたため、最上氏、上杉氏の侵攻を受ける。上杉氏の家臣の本庄氏に従属した関ヶ原の戦いの後は、最上氏が支配し鶴ヶ岡城の改築や城下町の建設を行うが、元和8年(1622年)お家騒動で改易、その後は酒井氏が13万8千石で入封し庄内藩を立藩した。

一方の酒田は、歴史は古く平安時代には出羽国府(城輪柵)が置かれ、当時の政治的中心で中央との繋がりもあったと考えられている。文化的にも高い地域だった。中世には鶴岡と同じ武藤氏が支配し一族の東禅寺氏が周辺を統治していた。戦国末期に失政で混沌となり、最上氏と上杉氏が交互に支配する世情不安定な状態が続いた。その後、鶴岡と同じ酒井家が治めることになって安定した。

江戸中期までは安定した藩政を行っていたが、5代忠寄が老中に就いて財政がひっ迫した。庄内藩は、酒田の本間光丘に藩財政立て直しを委任して再び安定した。その後領地替えが起こったが、領民の幕府への直訴で取り下げられるという前代未聞の事件が起こった。

庄内藩はこうして、鶴岡と酒田の両輪で安定した政治が行われ繁栄した。酒田には古くから奥州藤原氏の家臣36人の子孫と呼ばれる「酒田三十六人衆」が自治組織を作り上げていた。鎧屋や本間家といった日本有数の豪商が育った。寛文12年(1672年)河村瑞賢が西回り航路を整備すると酒田港は北前船の寄港地になり。最上川の舟運もあって内陸部の米や紅花や青砥といった商品作物も、一手に取り扱い飛躍的に繁栄した。その中でも、本間家中興の祖本間光丘は、武士の身分を許されるが、質素な生活を貫く勤儉力行型の人で、「徳は得なり」と説いた。日本屈指の大地主となり藩政にも深く関わり、窮民対策、砂防林植林(酒田西浜一帯)など、この地では公益家としても広く知られている。酒田発展の基盤をつくった。

鶴岡公園内にある110年前建立の「平田君遺徳碑」の碑文に「公益慈恵」の文字が四回も登場している。平田安吉は、荘内米の品質向上や「農業の開発、改良、科学化に努め、『私』を超えて『社会全体の発展』」という視点で活躍した人である。このように庄内藩の武士、実業家や商人達は、儲けることだけでなく、「人のため、世のため」になろうと稼いできたのである。この他にも現在、鶴岡や酒田市内の公園にある「公益の碑」が、昔からのものがいくつか残って建っている。酒井調良(松ヶ岡開墾やたねナシ柿の品種改良)、酒井勝貫(無料診療)、佐藤霊山(日本最初の給食)など、この地には多くの「公益」の先駆者たちがいたことが分かる。

山形から芽吹く「公益」の大学

鶴岡のまち歩きの途中、古い街並は余り見かけなかったが、城址周辺には、酒井氏縁の社寺仏閣や藩校致道館、ほかに致道博物館、旧西田川郡役所、旧鶴岡警察署、鶴岡カトリック教会天主堂、大宝館などの明治大正期の洋風建築が多く見受けられた。

そこにモダンなガラスを多用した建物がふたつあって、一つは「鶴岡アートフォーラム」で、もう一つは、「東北公益文科大学大学院・慶応義塾大学先端生命科学研究所」だった。建物にも興味があったが、最近耳慣れない「公益」に関心を持ち中に入ると、パンフレット類の展示スタンドがあった。その中に、何種類かの小冊子があったのでいただいていた。その夜は、鶴岡市郊外の湯野浜温泉に宿をとった。入浴・食事をそこそこに済ませ布団に横になり、いただいていた小冊子を読む。

2001年4月開学の東北公益文科大学のキャンパスは、酒田市にあることが分かった。鶴岡は大学院だった。「大学院ニュース」の見出しに、「地域の問題解決に貢献する大学院を目指して」と修了生への言葉として、公益学科科長の大歳恒彦氏の記事が掲載されていた。この大学院の修了生のほとんどは、社会人で出身をみると自治体職員(県・市)、教員(高専・高校)、市議会議員、農協職員、会社員と一般市民など多彩な顔ぶれという。

研究テーマも、行政経営、学校教育、地域活性化、まちづくり、労働問題、住環境問題、地域福祉・障害者問題など多様に渡る。地域に貢献するとして地域に密着しながら研究を進めている大学院だ。山形県と山形庄内地域の14市町村の支援と地元経済界を中心とした市民の後援も受け、大学が地域そのものであり、地域が大学そのものであるとの在り方を理念・理想としている珍しい大学である。

東北公益文科大学学長の小松隆二氏は、「公益(活動)は、経済(活動)と手をつなぎ、協力することによって社会全体を調和のとれたものにします。経済活動はモノをつくり、経済的豊かさを生み出しますが、倒産、失業、貧困、差別などいろいろの社会問題も生み出し、社会に不満や対立を広めます。そういった点を解決や調和する役割を果たすのが公益(活動)です。経済と公益が調和することによって初めてよりよいまち、よりよい暮らしが実現します。」と述べておられます。

また、「その豊かな歴史と事跡、試行と革新、そしてそれらを暖かく見守り包み込んできた美しく大らかな自然や景観から生まれたのが『公益学』であり、『公益大学』である。」と大学設立宣言にあった。

最後に、この大学の「理念と使命」を紹介する。

理念：「尊重し調和へ」

使命：「人材育成(教育)——『知を咲かす』」。公益の視点から、豊かな教養と専門性を身に付け、地域や国際社会の課題に挑戦する公益人を育成します。

公益学の確立(研究)ー「知を結ぶ」。さまざまな学問を深めるとともに、公益の視点から学際的に議論し、公益社会を導く原理、知識、実践スキルを「公益学」として体系化します。

地域共創(貢献)ー「知をひらく」。社会の一員として、市民との知的交流を積極的に展開し、共に、地域課題の解決や教育・文化の向上を目指し、行動します。

私は、この大学から巣立った若者、大学院を修了した社会人が、庄内をはじめ山形県内で公益人として活動されると、数年後にはこの地の江戸中期の繁栄が、再び新しい「公益」をもって繁栄すると確信する。そして、山形から発信された「公益」が、全国に伝播し地方が元気になることを願う者である。「大学まちづくり」に拍手！

参考資料：「現代と公益」創刊号・2号/「大学院 NEWS」NO.8 /小冊子「公益の源流を歩く。公益の足跡をたどる、公益を考える。」すべて東北公益文科大学・大学院発行/鶴岡市観光協会ホームページ等より抜粋

事務局だより

定例会のおしらせ

- ・7月の定例会は7月1日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～
- ・8月の定例会は8月5日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(5) 18:00～

——会計担当からのお願い——

今年度の会費が未納の方は、下記にお振込みを
どうぞよろしくお願いいたします。

口座：「ゆうちょ銀行」 10160 - 67915431

名義：町田まちづくり市民会議

お台場の上勝町がやってきました！

6月13日(土)と14日(日)、東京お台場のメディア
アージュを会場として、「お台場が阿波とくし
まになる2日間」と題して、上勝町を中心とし
て徳島県の魅力を紹介する展示や物産品の販
売が行われました。このイベントには上勝を中
心に活動している NPO 法人ゼロ・ウェイスト
アカデミーの活動を紹介するパネル、手づくり
のおもちゃで遊べるブースもお目見えしまし
た。



この2日間、特設ステージでは(株)いろどりの
横石社長のトークショーや阿波踊りなどの
イベントが生まれ、お台場に遊びに来ていた家
族連れやカップルが上勝の元気に触れました。
6月8日(月)には上勝を舞台としたドラマが放
映されるなど、独自のまちづくりが全国から注
目されている上勝町はますます元気です。

編集後記

今号は取材記事ふたつ、寄稿ふたつ
のあわせて四つのまちづくりにかんする
読み物を掲載しました。本紙『まちづくり
の環』では市内で活動する市民の団体や
運動に密着した取材を今後とも強化して
いきたいと思えます。以下、取材中の編
集部記者からの予告です。

◇ ◇ ◇

昨年、町田市制 50 周年記念の文化事
業としておこなわれた「屋根のない博物
館 玉のよこやまアート&ウォーク」、その
模様と今年 2 月におこなわれた玉のよ
こやま未来史シンポジウムの内容につ
いて、本紙ですでに紹介しました。意欲的
な文化事業として心にとめておられる読
者のかたも多いのではないのでしょうか。さ
て、今年はどのようなイベントが始まるの
でしょう。また、去年のイベントで生まれ
たネットワークは今もどんな活動を続け
ているのでしょうか。次号から相原の方
たちへの取材を中心に、数回にわけて記
事していく予定です。ご期待下さい(Y.M.)

◇ ◇ ◇

ということで、次号もどうかご愛顧のほ
どよろしくお願いいたします。会員のみな
さまからの寄稿も随時お待ちしております。
編集部までご一報ください (H.I.)

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報
2009年6月29日第71号発行
発行者 佐藤東洋士
編集責任者 井上弘貴
事務局 常盤町桜美林大学内
TEL 042-797-6947